

ノー マナー

小柳いすず

十年以上も経つのに、私の脳裏から消えることのない出会い——それは成田発サンパウロ行きバリグ航空の機内での事。

初めての機内食が出てからどのくらい経つただろうか、機内の明かりは落とされていた。座席に身を沈め、私はアルゼンチンに向かうことになった経緯を思い返していた。隣の座席には、同級生でタンゴ歌手の小原みなみさんが、体を休めるように静かに眼を閉じていた。彼女は、アルゼンチンで開催されるコスキン祭*に日本代表としてノミネートされ、大役を果たすべく現地に向かっていた。ひよんなことから、私がお伴することになったのだ。

乗客は皆眠っているのか、話声は全くなく、席を立つ者も誰ひとりなかった。ただ、低いゴォーというエンジン音が響いていた。その内に、私もうとうとし始めた。

突然、ワァーという号泣が私を目覚めさせた。その声は、私の左隣の座席から聞こえてきた。びっくりして、眼を移すと、若い女性が大声を挙げて泣いているのだった。

「ワァツ ザ マター？（どうしたの？）」

スペイン語が話せない私は、英語で聞いた。

その女性は、英語も理解できそうなのでほっとした。母親が入院したので、出稼ぎに行っていた韓国から、急遽チリに戻るところだと答え、自分は「ノー マナー（無一文）なので、入院費が払えない。どうしよう」とまた泣き始めた。小原さんを起したくない私は、「詳しく話してごらん」と静かに尋ねた。三カ月間働いたのに、雇い主はお金を払ってくれなかったと言う。

「警察には行ったの？」と尋ねると、ポリースという言葉が分からないという身振りをする。おそらく観光ビザで韓国に入ったので、就労は違反となり、給料を払うように請求できなかったのだろう。あるいは、韓国での生活や仕事を始めるに当たって借金をして、帳消しになったのかも知れない。

「チリに戻る飛行機代はどうしたの？」

「韓国の教会の人達が、カンパしてくれた」

彼女は泣きながら答えた。そしてまた、「どうしよう」と号泣し始めた。

チリに母親や弟妹たちを残し、並々ならぬ覚悟をして、地球の反対側の異国にまで出稼ぎに行ったのに、弟や妹たちへのみやげのひとつもなしに、無一文で帰ることになった悔しき、悲しきが伝わってきた。

「日本には、生活保護というものがあるけど」と私の言葉に、その娘は「チリにはそんなものはない」とまた泣く。

「泣いていても、何も解決しないのよ。日本には、『泣きっ面に蜂』という言葉があるの。泣いている人には幸福の女神は微笑んではくれないのよ。幸運は逃げていくの。代わりに、不幸が寄ってくるのよ」

その娘は涙に濡れた眼を丸くした。

「それ書いてください」と言い、「プリーズ」を繰り返す。私は持っていた日本の絵ハガキを取り出して、英語で書いて手渡した。彼女はそれを大切そうに何度も読み、「グラシヤス（ありがとう）」と微笑んだ。可愛い笑顔だった。

「これわずかだけれど、お母さんへのお見舞い」

娘は一瞬びっくりした顔をしてグラシヤスと言い、また笑顔をみせた。

やがて睡魔が襲い、私はうとうとし始めた。しかし、しばらくすると、また彼女の号泣に起こされた。前の座席の人にも、後の人にも、その泣き声は、睡眠の妨げになるだろう。

日本人だったら、声を殺して泣くだろうにと、少々腹立たしく思った。何としても、小原さんを起してはならない。そうだ、スペイン語を教えてもらおう。私は、旅行会話の小さなノートを取り出して、「読んでくれませんか」と頼んだ。

今泣いたカラスが、にっこり笑って、さすがにネイティブ（現地人）の流暢な発音で読んでくれた。そして、私に読んでみなさいと言う。私が読むと、笑いながら首を振り、綺麗な発音をしてみせて、繰り返すように促す。数の教え方や、曜日などは、私が暗誦できるまで繰り返し教えてくれた。優しい笑顔で、生き生きしていた。

「あなたは、きっと弟さんや妹さんの勉強をみてきたのね。教え方がとっても上手だわ」とうとう、朝になったのか、機内の明かりがつき、人々が動き始めた。私は彼女の熱心な教え方にすっかり感動して、

「ありがとう、とても楽しく勉強できたわ」

彼女の顔は輝いていた。

「日本では、個人教授の月謝はとても高いの」

彼女に数枚の紙幣を握らせた。彼女は涙ぐんで、紙幣を握り、グラシヤスを繰り返した。

その時、アナウンスがあり、ロサンゼルスに着いたようだ。給油のため、飛行機をいったん降りて、荷物を持ってトランジット・ラウンジ（乗り換え用の待機室）に移動するらしい。他の乗客と一緒に、小原さんの後に付いて、荷物をもって移動し始めた。

「あの人は、お宅を探しているではありませんか」

突然、背後から男性に声を掛けられた。指さす方を見ると、ガラス張りの一室に、一団の乗客がいた。一番手前に、隣の席にいたチリの娘さんが、大きく手を振りながら、声を限りに何かを叫んでいる姿が見えた。私が気付いたことが分かると、小躍りした。

「短い時間だったのに、よく心を通わすことができましたね」

その男性は、私たちの後の座席にいた人なのだろうか。

ところで、あの一団は、ここで乗り換えをするのだろうか。彼女の声は聞こえなかったが、涙をいっぱい溜めて、懸命に手を振って叫んでいる姿に私は胸が痛んだ。乗り換えのどさくさに、励ましの言葉もかけぬまま別れた。心の底に、お金を渡したから、もういいですよ、という思いがあったことを恥じた。

「ごめんね」

何度も振り返っては手を振り、トランジット・ラウンジへと歩を進めた。

彼女との出会いを皮切りに、私たちのアルゼンチン・コスキンへの旅が始まっていた。

※アルゼンチンのコスキン市で開催される、南米最大のタンゴ・フォルクローレの祭典。

(了)